

## 原 著

## 作家「伊藤計劃」

——病と創作——

高 橋 徹\* 松 下 正 明\*\*

〈抄録〉2009 年に、がんで早逝した SF 作家の伊藤計劃を対象として、特に伊藤氏の個人ブログ『伊藤計劃 第貳位相』にある闘病に関する箇所を抜粋したうえで、「病と創作」をテーマに考察を行った。ストレス心理学における「コーピング」の概念、特に「考え込み型反応」と「気晴らし型反応」の概念を使うことで、がん闘病下における伊藤氏の心理的変遷を検討した。また「病と死」に対峙した心理状態が、創作に及ぼした影響に関しても検討した。「意識」と「死」に関する伊藤計劃の思想的基盤として、「進化心理学」の存在を指摘し、それらが『ハーモニー』の創作に与えた影響について考察した。

病跡誌, 89 : 65-80, 2015

## I はじめに

伊藤計劃（いとうけいかく：Project Itoh, 本名：伊藤聡）は、2009 年 3 月に 34 歳で早逝した SF 作家である。死因はがんであった<sup>注1)</sup>。その作家活動は晩年の 2 年に満たない期間であるが、闘病生活のなかで執筆された『虐殺器官』（2007 年）と『ハーモニー』（2008 年）は数々の賞を受賞、さらに英訳された『ハーモニー』は 2011 年に米国の「フィリップ・K・ディック賞」の審査員特別賞を受賞した。雑誌 S-F マガジンは、2009 年 7 月号にて「伊藤計劃追悼」を企画し、遺稿『屍者の帝国』を掲載、2011 年 7 月号には「伊藤計劃以後」と題した特集を組んでいる。エッセイや対談、個人ウェブサイトに掲載された映画評などを収録した『伊藤計劃記録』が 2010 年に、また短編や個人ブログなどを収

録した『伊藤計劃記録 第貳位相』が 2011 年に早川書房より刊行された。さらに遺稿『屍者の帝国』は盟友である円城塔が完成させ、伊藤計劃と円城塔との共著として 2012 年に発刊された。（出版・創作物の発表年を表に示す：年表）。伊藤計劃が遺した作品と創作活動の記録は、没後も多くのクリエイターに影響を及ぼし続け、SF 作家の神林長平は、『ハーモニー』に応答することを意識して、『いま集合的無意識を、』『ぼくらは都市を愛していた』（2012 年）を執筆したと語っている<sup>13)</sup>。そして『虐殺器官』『ハーモニー』『屍者の帝国』は、2015 年に劇場アニメとして映画化されることが決定している。

以下は、『虐殺器官』（ハヤカワ文庫版）巻末に掲載された大森望による解説の抜粋であるが、伊藤計劃の略歴、闘病、創作の概要が簡潔に記されている<sup>8)</sup>。

A novelist 'Project Itoh': The cancer and story writing

\* 信州大学医学部精神医学教室, Tohru Takahashi : Department of Psychiatry, Shinshu University School of Medicine.

\*\* 東京都健康長寿医療センター, Masaaki Matsushita : Tokyo Metropolitan Geriatric Hospital and Institute of Gerontology.

「伊藤計劃は、1974 年 10 月 14 日、東京都生まれ。武蔵野美術大学美術学部映像科卒。（中略）本業は、民放キー局系列のウェブ制作会社に勤務するウェブ・ディレクターだった。しかし、冗談まじりに「職業：病人」と自称していたように、病魔との闘いは『虐殺器官』以前から始まっていた。最初に癌が

西暦	年齢	創作・作品	治療
2001	27 歳		下筋肉腫手術
2003	29 歳	『女王陛下の所有物』 (武蔵野美術大学漫画研究会 OG & OB 本)	
2004	30 歳	『Heavenscape』(個人 web サイト初出) 『伊藤計劃：第貳位相』(ブログ) 開始	
2005	31 歳	『フォックスの葬送』(私家版 CD-ROM)	肺転移・手術 抗がん剤
2006	32 歳	『虐殺器官』第 7 回小松左京賞に応募	肺再手術 抗がん剤
2007	33 歳	『虐殺器官』(オリジナル長編第一作) 発刊 『The Indifference Engine』(短編)	肺再手術 抗がん剤
2008	34 歳	『メタルギア ソリッド ガンズ オブ ザ パトリオット』(ノベライズ) 『From the Nothing, With Love』(短編) 『ハーモニー』(オリジナル長編第二作)	抗がん剤 放射線治療 モルヒネ治療
2009	34 歳	逝去	
2012		『屍者の帝国』 伊藤計劃×円城塔	

表 伊藤計劃 年表

つかったのは 2001 年夏(中略)。手術と治療を経て、その後しばらくは健康をとりもどすが、05 年 6 月、左右の肺に転移が見つかり、7 月に肺の一部を切除。(中略)長く続いた抗癌剤治療が一段落したのが 06 年 4 月。(中略)この直後に(抗癌剤の副作用からようやく解放されて)『虐殺器官』を書きはじめたことを考えると、著者が人生の残り時間を計算していなかったはずがない。(中略)06 年 5 月、会社勤めのかたわら『虐殺器官』をわずか 10 日ほどで一気に書き上げ、第 7 回小松左京賞に応募する。(中略)すべての校正作業を終え、刊行を目前に控えた 5 月中旬、新たな転移が見つかり、月末に手術。2 週間の予定だった入院はまる 1 ヶ月に及び、『虐殺器官』の発売日を病院のベッドで迎える。このあたりから、1 ヶ月のうち半分は病院で過ごすような生活が日常になってくる。だが、入院中も毎日のように mixi 日記を更新。ブログでもギャグを交えた入院日記を書いていた。(中略)明けて 2008 年には、『虐殺器官』が「ベスト SF2007」の第 1 位に選ばれ、短篇第 2 作となる『From the Nothing, with Love』を、SF マガジン 2008 年 4 月号に寄稿。(中略)だが、5 月にはまたも新たな転移が見つかり、病院で過ごす時間がますます長く

なってゆく。『虐殺器官』に続くオリジナル長篇の執筆は難航していたが、7 月中旬、『ハーモニー』のプロットがついに完成。月末に入院してから病室で書きはじめ、日によっては 1 日 30 枚に達する驚異的なペースで執筆。若干の中断をはさみ、第一稿が完成したのは 8 月末だった。(中略)だが、9 月からはモルヒネ治療が始まり、病室で執筆することも次第に難しくなる。この時期、癌の病巣は 6 ヶ所を数え、抗癌剤と並行して苛酷な放射線治療も行われていた。12 月、第二長篇『ハーモニー』刊行。『虐殺器官』の続篇というか、その延長線上にある作品だが、そこでは(皮肉にも)あらゆる病気が駆逐され、すべての人間が健康になった未来社会の息苦しさが描かれている。のちに『ハーモニー』は、星雲賞日本長編部門、日本 SF 大賞、ベスト SF 国内篇第 1 位と、日本 SF の三冠を獲得するが、著者が生きてその喜びを味わうことはなかった。病気の進行の速さに比べて、評価が追いつくのが遅すぎたというべきか。明けて 2009 年。年始めにいったん退院するが、1 月半ばに再入院。月末から急速に体調が悪化する。それでもなお、ベッドの上で、河出書房新社の依頼で書く予定だった第四長篇『屍者の帝国』の構想を練ってい

た。(中略) この長篇の“試し書き”として編集者に渡された 30 枚ほどのプロローグが、伊藤計劃の最後の小説作品となった。<sup>8)</sup>

近年、サイコオンコロジー（精神腫瘍学）が、がん医療における精神・心理的問題を扱う領域として精神医学と緩和医療のなかで確立され、広く普及してきた。がん患者の心理過程は多様であり、個々の事例ごとに検討されるべきであるが、患者が記した闘病記を読むことも、患者心理を理解するうえでは役立つものと考えられる。本論でとりあげる伊藤計劃のブログは、ユーモアをまじえた文章のなかにも、病と死に対峙する心理的葛藤が織り込まれており、読者の情動を深く揺さぶる。また「日常生活」「がん闘病」「創作活動」の過程を、同じ時間軸のなかで理解できるものであり、「創造性の学」を論じる資料としても貴重な記録と考える。本論では、伊藤計劃を対象に「病と創作」をテーマとして、がん闘病下での心理と創作との関連性を考察した。

## II 資料検討の結果

伊藤計劃のブログ（はてなダイアリー）『伊藤計劃：第貳位相』<sup>12)</sup>から、特にがん闘病に関連した記述を抜粋した。（日記の「表題」「副題」は割愛。日付の表記方法や改行の変更・削除など、内容を改変しない範囲で手を加えた箇所がある<sup>注2)</sup>）。ブログの最終更新日は 2009 年 1 月 7 日であるが、亡くなる 3 月 20 日までの状況を補完するために、『虐殺器官』（ハヤカワ文庫版）の巻末に掲載された大森望の解説を引用した<sup>8)</sup>。さらに 2011 年 4 月 23 日のフィリップ・K・ディック賞授賞式（動画共有サイト Ustream にて視聴可）で代読された父親の謝辞を引用した。

### 1. ブログ「伊藤計劃 第貳位相」

2004-04-19 日記、というものからぼくはいかにも縁の遠い人生だった。3 年前に癌を患って、あんたいちおー死ぬかもしれんよ、わたし

が助けるからんなこたならないけどね、と恩人である先生に言われたときは、自分が結婚もしておらず子供もなく、この世に自分が生きてきたなにかしらのかたちや想いが遺らないことの恐怖、というやつに心底怯えてヤバげなサイコスパイラルに捕われたりもしたのだが、多くは覚悟でなく愚鈍と慣れによってなんとやら、とイノセンスで押井大人も申ししておりますように、死の恐怖すら人はあつというまに日常に回収してしまうものなのでございます。5 年生存率、という厄介な言葉もありますように、いまだって転移の可能性がないわけじゃございません。というのに、それにすら慣れてしまう。人間の鈍感さ（というか俺の鈍感さだけど）というのは、人間を発狂から救う重要なセーフティなのだと思う訳ですよ。そういうわけで、明日をも知れぬ身（文字どおり）に立たされてもお、日記をつけるという境地には至らなかったわけです（おそろしいことに）。怠惰さが切実さを圧倒した、というほとんどギャグのようなオブローモフ状態。で、私はといえば障害者になって映画が 1000 円で観ることができる！と喜んでいるありさま。愚かさというのはこういう精神的に便利な特典もついてくるので、そう悪いことじゃないとも思うのであります。

2004-06-10 （中略）聖橋を渡れば、そこには医科歯科大の神田川に壁面を成す建築が在り、そこには CT が待っている。ウィーン、と駆動音がシャープに唸り、人間を計測し数値化し仮想身体を汲み上げんとする欲望が産んだデウス・エクス・マキナがぼくのからだを輪切りにする。最近見た、医療被曝による癌罹患率の上昇を報じるニュースが、ちらりとあたまをよぎる。あっさりしたものだ。フィルムが焼き上がるまでの 20 分、ぼくは待ち合い室で寝ている。（中略）。そしてフィルムを受け取り、整形外科に行く。主治医の先生はそれを見て、何かを告げる。半年に一度、ぼくはこの一言、このオラクルを受け取りにここへ足を運ぶ。一昨日は眠れなかった。ひどいもんだ。臆病な自分に腹が立つが、どうしようもないことだ。「大丈夫です。とりたてて腫瘍の影はみられません」。

5年生存率、ということば。それ自体に意味はない。あくまで確率の話だ。6年後、10年後に転移が見つからないとは言い切れない。とはいえ、もう3年目。半分は越したわけだ。いろいろなことを思う。医者に自分の大腿の中に巣食うものの存在を告げられたときのこと。あるとき感じた絶望。そんな絶望も恐怖も悲しみもあっさり吹き飛ばしてしまった安定剤のこと。その化学作用によって感情が吹き飛んだときの奇妙な怒り。病院内から手持ちのノートにネットに繋いだこと。友人がエロゲーを持ってきてノートにインストールしてくれたこと。リハビリ。退院して、家に帰ってきたとき玄関から飛び出してきた、愛犬のぬくもり。お見舞いにきてくれた「尊敬する」人たち。病院で書いた原稿のこと。退院したあと、誰にもわからない理由で彼岸に渡ることを選んだサークルの後輩のこと。彼女の入った棺の小ささが意外だったこと。彼女から預かった同人誌の原稿が、データクラッシュで読めなかったこと。そして、いま、愛犬は彼岸にいる。あるとき、生きて帰ってきたぼくを抱き締めた温もりは、ペットたちの共同墓地にいて、そこへぼくは墓参りに行き、あふれる思いを、残された者たちが抱えるには多すぎて溢れてしまう情念を、墓にすくいってもらい、身軽になって家に帰る。(中略)。クローネンバーグだ、養老だ、身体だ、サイボーグだ、とか言っていたら、ほんとうにそういう人生を生きる羽目になってしまったことを、幸運とは思わないまでも、何かの符合であるぐらいには考えてもいいのかもしれない。

2005-03-20 整形外科の外で順番待ちをしていたら、深刻な顔の人が廊下に立っていた。かたわらには医者っぽい人が立っており、親族の方を呼んだ方がよろしいかと、などと言っている。危険な状態でしょうか、とその人がきくと、医者らしき人は頷いた。扉には緊急処置室、と書いてあった。(中略)。診察を受けて、出てきた時、その人は電話をかけているところだった。あそこで誰かが死につつある。(中略)。あそこで誰かが、その日死につつあった。死んだかどうかは、わからない。ぼくはすぐに病院を出て、

家に帰ったからだ。MRIをとったものの、やはりアレの主治医である医科歯科で、という話になって、MRIを貸出してもらった。たぶんただの炎症ですよ、と医者はいい、ぼくもはっきり言ってそう思う。転移ではあり得ない。けれど、ひた、ひた、とそこかしこに足跡を感じる。祖母が死んだとき。後輩が自殺したとき。愛犬が死んだとき。あるとき感じた匂いが、この数週間膝の痛みとともに、ずっとからだにまとわりついている。その匂いを、自然として、日常として生きることが出来る日がくるのだろうか。それは努力して獲得できるものなのだろうか。そうであるなら、努力したいけれど。逃れ難い感覚であるならば、せめて異界でなくそれを日常としたい。生活というフレームに収めたい。たぶん、ほとんどの人はそれができているのだろう。ぼくはそれを獲得できるだろうか。

2005-10-21 毎回入院する前は文章書こうとか絵描こう(中略)とか思って紙やらノートパソコンやら持っていくのだけれど、いざ抗癌剤が入り始めると、24時間続く吐き気と倦怠感でなににもできず、結局はDVDをノートで観るか、本を読むかで時間を潰すしかなくなる(中略)。というわけで今回の入院は、性欲並みに有り余る創作意欲(笑)が抗癌剤によってあっさり潰されたあと、持ち込んだ『戦争広告代理店』『武装解除』、ハスミンの『ゴダール革命』、そしてなぜか同僚から借りた『ダ・ヴィンチコード(上)』を読むか、DVDをひたすら見ている感じ。怪奇大家族のコメンタリーとかイノセンスのコメンタリーとかローレライのコメンタリーとか、なぜかハンニバルのコメンタリーとか。大学生のときは「俺みたいな出来損ないの遺伝子なんて残してたまるけえ」と、まあその歳のスノッパオタクとしてはふつーの気取りをもってはいたのだけれど、このクリティカルな病に見舞われてからは、人恋しさというか、露骨に孤独に対する耐性が弱くなった(だからと言ってオフ会とかには出たことはないのだけれど)。全く情けない転向ぶりであることよ。なんでそんなことを考えたかという、コメンタリー付のDVDばかりをセレクトしたのは、

ヒトの声を聴いていたい、ヒトが楽しそうに語っている様子を聴いていたい、という願望を満たすものとして、疑似的に逃避するためではないか、と思ったからだ。

2006-10-25　なんでこんなに間が空いたかという、ぶっちゃけ映画も本も読んでなかったからです。(中略)。DVD もなにもしない。なぜかという、いまここに至ってはじめてといっているくらいの鬱、「死にたくない」症候群が襲ってきたからです。最初のとき(5年前)も去年もここまでひどくはなかった。なにせ、夕方になるとかならず気がめいり、恐怖に体が震えはじめる、比喩じゃなく。これ以上転移したら、もう削る肺はどこにもないぞ。そこで終わりだぞ、と。こういうのは自分の脳みそのはなしなので、ああ、これは脳の各機能がそういう感情をジェネレートしやすい方向に傾斜しているのだな、とか考えても、何も解決するわけじゃない。サイクルがはっきりしているから、フィジカルな、どうしてもなく物理的な(ま、意識も物理現象なわけですが)問題なのは明らかなのに。まあ、風邪の事がわかったからって風邪が治るわけじゃないですけどね。(中略)。という時期がなんだか過ぎていったようなので(でも自分の病と『向き合う』なんてかっこいいことをしようものなら、あっという間にドツボに逆戻りしますが)、ボチボチまた書き始めたいと思いますです。

2007-08-02　実は6月一杯、入院していたのだった。肺の中であやつが再発してしまったので、5月末に手術をしたのである。というわけで、左肺を半分ほど取った。(中略)。ぼくが入院していた病院は、ネットがつかない場所だった。だから、22日に自分が書いたものが出ても、世間でどう受け止められているのかは知りようがない。というのは別にしても、ネットにつなげないというのはものすごい苦痛だった。携帯はmixiにつなげるものの(古い機種なので、携帯用にカスタマイズされた、ほどほどの容量のページしか観れないのです)病院内ではつかっていい場所は限られている。自分がこれほどネットに中毒しているとは自覚してい

なかった。朝自宅でアクセスし、会社では仕事そのものがwebで、帰ってきてまたつなぐ。電車の中で携帯を覗き込んでいる人々や、常時メールでつながっている女子高生とそう変わらない。(中略)。webには確かに、ある種の中毒性がある。麻薬のような、というとき、それは主にアディクションを指した比喩に留まることが多いけれど、告白すると、そう、ぼくはmixiに携帯でつないでいるあいだ、確かに不安を幾分か忘れられた。コミュニケーションには人の脳を恍惚に置く何かがある。肺をいくらか取り去り、いつ転移があるとも限らない(今回ののは、前回の場所の再発で、転移ではなかったのだけれど)。つまりは次々狭まっていく選択肢を見せ付けられて、死の影におびえていたぼくだけれど、携帯でつながっているときは、その不安がいくらか和らいでいたような気がする。目の前の問題から、目をそらすことができていた気がする。生き死にが問題であるとき、現実逃避するのが悪いことかというところでもない。ただ、生き死にが問題の場合厄介なのは、現実が重過ぎて目をそらすことが非常に困難だということだ。そのような局面に陥ったとき、人はむしろ現実しか見えなくなってしまうところが問題なのだ。だからこそ、宗教というものに目覚める人も多い。宗教のように強力なコンテンツでなければ、死からの逃避は難しいからだ。つまり、宗教に向かうことのできないぼくにとって、webは宗教と同じくらい強力なツールだった、ということだ(そのときはね)。webを介してつながっていることには、死の不安を和らげてしまうくらい強力な麻薬成分が潜んでいる。精神的モルヒネとでも言えはいいのだろうか。

2007-10-30　いまどうしているかという、例によって入院しているわけです。先週月曜日からですから、かれこれ一週間。CTの結果はシロ。とはいえぼくはもう一生「いまんとこ」シロとしか言われない人間ですけどね。もっとも人間誰しも「いまんとこ」なわけで、わたしは少々その「濃度」が高いというか、死ルートへ時間線がずれる確率が高いとゆーか。量子力

学的な問題だと思えば腹も立ちません。いや、腹が立つとか立たないとかそーいう問題じゃないですけど。もうあまり肺も残ってないしなあ。放射線を当てた左肺（の残骸）は「放射線を当てると膨らみが悪くなって近傍のリンパもやられるから、硬化して機能消失する場合が多い」と言われておりましたが、いまのところはもっているようです。これからどれだけでもつかはわかりませんが。

2008-11-05 隠すのもいろいろと面倒くさくなってきたので書いてしまうと、最近ではなの更新が薄味なのは（自覚しております）、私が現在、例の病気の再々発と5月あたりから戦っているからなのである。会社を一年休むと決めて、日常のほとんどを病棟のベッド周辺2メートルで過ごしているわけです。転移は頭から足まで6カ所ほどあり、抗癌剤で抑制しつつ放射線を連日浴びせるという生活が続いています。6カ所転移というと結構びびりますが、医者が高楽天的なので、まあ、希望を持っていいのでしょう。（中略）これ何が辛かって抗癌剤の副作用とか吐き気とかじゃなくて、小説を書くのに障害が出る。入院前は「時間だけはたっぷりあるし、量産できるかな」と思っていたら大間違い。資料だけあっても、小説というのは書けないんですね。自分の書物に埋め尽くされた部屋で、好きなときに好きな本を本棚や床の上から引っ張ってこられるような環境じゃないと何も浮かばない。まっしろ。取りあえず次の作品はめでたく最終チェックに辿り着きましたが、それもほとんどは5月に病状が発覚する前におおかた仕上げていたから可能だったのであって、いくら時間があっても病院ではエッセイとかならともかく小説は一文も進まない。なので、社会人としても、新人物書きとしても、ブログ書きとしても一日も早く自分の部屋に戻って安心したいものです。

## 2. 2009年2月-3月

（『虐殺器官』（ハヤカワ文庫）巻末掲載の大森望による解説から）<sup>8)</sup>

それまではどんな悲惨な状況でも笑いを忘れ

なかった mixi 日記にも、この時期、悲痛な叫びが混じりはじめる。閲覧者を友人に限定した2月7日のエントリでは、「以下は、自分がどこまで弱い人間かという記録である」との但し書きをつけたうえで、迫りくる死に対する恐怖を率直に記している。〈尿も出ず、排便も出来ず、いま私はベットの上で縛り付けられている/死ぬということを自分がまるで受け入れていなかったということに愕然としながら。（中略）/これから死ぬ自分を受け入れるにはどうしたらいいのだろうか。/だれか、助けになる方法を知っていたら教えて欲しい〉

そして3月20日夜、日本SFを変えた不世出の作家は、ついに力尽きる。あまりに早すぎる死だった。最期の模様は、2009年7月の星雲賞授賞式に故人にかわって登壇したご母堂がこう語っている。

〈息子は、今から7年前、右足の膝から下を司る神経に癌が見つかり、手術をしまして、右足の感覚を失いました。それから3年ちょっとは癌もおとなしくてたんですが、今から2年ちょっと前に両肺に転移が見つかりました。そのとき息子は、「両足がなくなってもいいから、僕はあと20年、30年生きたい。書きたいことがまだいっぱいある」と申しておりました。『ハーモニー』は、苦しい抗癌剤と放射線の治療の中で書き上げたものでございます。3月20日に亡くなるだいぶ前から、食事や水もあまり摂れない状態になっておりましたけれど、亡くなる日の夕食に大好きなカレーが出て、少し食べてみると言ひまして、スプーンに10杯くらい食べたんですね。それから1時間ぐらい経ってから、床ずれを防ぐために姿勢をちょっと変えたところ、すーっと意識がなくなって、そのまま亡くなってしまいました。お腹が空いたまま逝ったら、三途の川も渡れなかったんじゃないかと思いますが、最後にカレーを食べたので、今帰ってこないところをみますと、なんとか向こうにたどりついてるんじゃないかと思ひます。応援して下さった皆様、おつきあいして下さった皆様、本を読んで下さった皆様、ほんとうにありがとうございました〉

### 3. フィリップ・K・ディック賞（審査員特別賞）授賞式（2011年4月23日）において代読された父親の謝辞

〈このような大きな意義のある賞をいただいたことに対しまして、深くお礼を申し上げます。短い命、そしてたった1年あまりの表舞台での作家活動ではありましたが、数知れない方々の励ましとお見舞いを得られたことにより、闘病生活をしながら書き続けられたのだらうと思います。『ハーモニー』を最初に読んだとき、長くない命と感知しながら、死に対する不安と必死に戦い、心の安寧を求めている彼の苦悩を直視するのが辛く、なかの文は流し読みして、最後の「感謝を捧げます。——私の困難な時にあって支えてくれた両親、叔父母に。」の箇所を読み終え本を閉じました。死と闘いながら、この不安な現在の社会に違和感をおぼえ生きている人達にも、ある種の希望があると伝えているのだと思います。そういう点も評価され、受賞できたのだとすれば、聡も喜んでいることでしょう。本当にありがとうございました〉

## Ⅲ 考 察

### 1. がん闘病下における心理的変遷

死へと至る人の心理過程に関する最も有名な著作は、精神科医であるE・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間——死とその過程について』<sup>15)</sup>だろう。キューブラー・ロスは、多くの終末期患者との対話から、死に対する心理過程には、「否認と孤立」「怒り」「取引」「抑うつ」「受容」の5段階があるとした。一方、心理学者のE・S・シュナイドマンは、「人は人が生きてきたように死んでいく」と述べている<sup>35)</sup>。またその両者の意見を踏まえたうえで、明智は、「がんにおける経過と心の問題はそれほど単純ではありません」「死にゆく過程を医療者の思うように方向づけることはできないということ、あるいはすべきではない」「ある人は、その苦悩のなかにも安寧を見出すことができますが、別のある人は、やはり苦悩のなかで、もがきながら亡くなっていかれるように思います」と述べ、患者

の個性性を強調する立場をとっている<sup>1)</sup>。高橋も、緩和ケアにおいては、「治療者側の価値観が患者側に投影されていないかどうかを客観視する視点は保ち続ける必要がある」「疾病受容は起きるときには起きるし、起きないときには起きない」と論じたことがある<sup>38)</sup>。

病や死に対峙した際の心理過程は多様であり、何らかの概念化をして一般化させることには慎重であるべきだが、伊藤計劃の心理過程を理解するためのひとつの切り口として、本論ではストレス心理学の概念を用いて考察する。

人はストレスに直面したとき、様々な対処方法によって、その苦痛を緩和させようとする。これをコーピング(coping:対処)とよぶ。コーピングの様式は、ストレスの大きさや状況、個人の性格特性や思考パターン等によって変化するものである。特に、「がん告知」や「がんの再発」「終末期」といった強いストレス状況下においては、感情(怒り、抑うつ、悲嘆など)や思考(否認、諦観、前向き思考など)、行動(気晴らし、自閉、対人交流など)といった側面から、意識的・無意識的なコーピングがなされる。各人の人格特性によって選択されやすいコーピングがあり、特に強いストレス状況においては、それまでに使い慣れたコーピングがうまく機能することが多いと考えられるが、一方、それまでとは異なるコーピングを選択することが苦痛の緩和に役立つこともある。

ラザルスらが提唱するストレス心理学では、コーピングを「情動中心型対処(emotion-focused coping)」と「問題中心型対処(problem-focused coping)」の二種類に区別している<sup>16,17,18)</sup>。「情動中心型対処」とは、ストレスフルな状況自体は変えることなく、ストレス状況で生じた情動を低減することを目指す。例えば「脅威になることについて考えることを回避する」「否認する」「出来事から距離を置く」、あるいは「積極的な価値を見いだすために再評価する」といった方法が含まれる。「問題中心型対処」とは、苦痛をもたらす問題に対して、具体的に積極的な課題解決を導きだそうとするものである。例えば「環境に対して行動を起こす」「個人

の行動を変化させる」などがあげられる。ただし、この二つの対処スタイルは、実際には明瞭にわけることとはできず、また相互作用の関係にあり、二者択一概念ではない<sup>18)</sup>。例えば、ストレスや不安を和らげるために抗不安薬を服用するという対処行動は、感情を調整するという手段によって問題を解決しており、「問題中心型」と「情動中心型」の両方の側面をもっている<sup>17,18)</sup>。ラザルスは、「普遍的に効果的または非効果的な対処ストラテジーは存在しない」とも述べており<sup>18)</sup>、コーピングの有用性に絶対的な規準はなく、状況や個性などの要素を背景として、全体的な文脈のなかで評価されるものである。一方、終末期という状況下においては、疾病を治癒させるという意味での積極的な問題解決は困難であることから、「問題中心型対処」は限定的とならざるをえず、主に「情動中心型対処」が選択されることになる<sup>17)</sup>。菱川らは、緩和ケア病棟入院の終末期患者を対象としたコーピング行動の調査から、各患者が複数の様々なコーピング行動を用いて死を受容しようとしていると報告している<sup>7)</sup>。

ここでさらに、同じストレス心理学のなかでも、特に「反芻思考 (Rumination)」の概念を確立させたノレン-ホエクセマ (Nolen-Hoeksema) の研究を汎用することで考察を進めることにする。ノレン-ホエクセマは、抑うつ状態に対するコーピング・スタイルとして、「考え込み型反応 (反芻思考型反応: ruminative response)」が抑うつ状態を持続させるという仮説をたて<sup>27)</sup>、「気晴らし型反応 (distracting response)」と対比させる研究を行った<sup>28)</sup>。そして「考え込み型反応」(抑うつ気分について繰り返し考える反応)と「気晴らし型反応」(抑うつ気分から意図的に注意をそらす反応)では、前者は抑うつを持続させ、後者は抑うつから回復させると考えた<sup>28)</sup>。また偶然に実現した縦断的研究では、学生的情動中心型コーピング傾向を調査中にサンフランシスコ大地震 (1989 年) が起こり、地震から 10 日後と 7 週間後に抑うつ感と不安感の度合いを測定したところ、考え込み型反応を行っていた学生において地震後の抑うつ気分と

不安感が高く、またその状態を持続していたと報告している<sup>29,30,36)</sup>。

本邦では友田らが、129 人の大学生を対象にした研究で、「考え込み型反応」は気分を悪化させ、スポーツや読書などの「気晴らし型反応」は気分を改善させたと報告した<sup>40,41)</sup>。また友田らは、抑うつ気分を経験したことのある 47 人を対象とした調査で、男性では読書や事務作業などの「気晴らし型反応」をする方が、抑うつ気分の持続時間が短いという結果を報告した<sup>42)</sup>。一見すると、「考え込み型反応」のほうが、沈黙思考することで、より深い洞察と根本的解決が得られそうにも思われるのだが、これらの研究結果は、「過度な内省」が心理状態をかえって悪化させる可能性があることも示唆している<sup>39)</sup>。

ちなみに PTSD (心的外傷後ストレス障害) 研究においては、早期介入がかえって心の自然な治癒プロセスを妨げる可能性も指摘されており<sup>43)</sup>、自動車事故の被害者を対象とした追跡研究 (ランダム比較試験) では、介入群でその後の不安や抑うつ傾向が高く、非介入群で回復傾向が認められたとの報告がある<sup>22)</sup>。あるいは、古典的・定型的な認知療法が「思考の変化」を重視してきたのに対し、その後に提唱された第三世代の認知行動療法では、思考や感情にとらわれない「あるがまま」の姿勢 (森田療法との近似性が指摘されている)<sup>24)</sup>を重視するようになっている。このように定型的と言われてきた精神療法やカウンセリングの治療法にも、それぞれのメリットとデメリットがあり、逆に非定型とみなされていた介入が、ときに有効なことも少なくない。「気晴らし型反応」という言葉からは、現実逃避的なニュアンスを想起させられるかもしれないが、コーピング自体に優劣はなく、状況に応じて用いられる「気晴らし型反応」は、効果的なコーピングのひとつといえる。

## 2. コーピングとしての「気晴らし型反応」

伊藤計劃は、相当な映画ファン (映画通) であり、ウェブサイトによくの映画評・映画紹介を掲載している<sup>11)</sup>。またゲームデザイナーであ

る小島秀夫の熱狂的なファンでも知られ、映画やゲームの二次創作として作られた短編作品が、小説『虐殺器官』や『ハーモニー』の原型と考えられている<sup>11,12)</sup>。ブログ内にも、多くの映画や小説に関する批評や紹介が書き込まれており、またウェブ・ディレクターの仕事をしていたことから、インターネットの世界は、本人にとって慣れ親しんだ居場所であったと考えられる。それら趣味や仕事の世界は、闘病下においてもストレスを減ずるコーピングのひとつであったと想像される。伊藤計劃自身も、自覚的に以下の言葉をブログ内に著している。

「コメンタリー付の DVD ばかりをセレクトしたのは、ヒトの声を聴いていた、ヒトが楽しそうに語っている様子を聴いていた、という願望を満たすものとして、疑似的に逃避するためではないか、と思ったからだ」(2005 年 10 月 21 日)

「つまりは次々狭まっていく選択肢を見せ付けられて、死の影におびえていたほくだけれど、携帯でつながっているときは、その不安がいくらか和らいでいたような気がする。目の前の問題から、目をそらすことができていた気がする」「生き死にが問題であるとき、現実逃避するのが悪いことかというそうでもない。ただ、生き死にが問題の場合厄介なのは、現実が重過ぎて目をそらすことが非常に困難だということだ。そのような局面に陥ったとき、人はむしろ現実しか見えなくなってしまうところが問題なのだ。だからこそ、宗教というものに目覚める人も多い。宗教のように強力なコンテンツでなければ、死からの逃避は難しいからだ」「つまり、宗教に向かうことのできないほくにとって、web は宗教と同じくらい強力なツールだった、ということだ。web を介してつながっていることには、死の不安を和らげてしまうくらい強力な麻薬成分が潜んでいる。精神的モルヒネとでも言えればいいのだろうか」(2007 年 8 月 2 日)<sup>13)</sup>

あるいは「自分の病と『向き合う』なんてかっこいいことをしようものなら、あっという間にドツボに逆戻りしますが」(2006 年 10 月 25 日)とも語られており、これらの言動からは、伊藤計劃自身が、病と死に対峙することの難しさを

十分に自覚していたことがうかがえる。要するに、小説や映画、ウェブなどによる「気晴らし型反応」が選択されていること、そしてそれがある程度は有効に機能したことを、伊藤計劃は自ら客観的に内省し、また率直に認めているのである。

### 3. 「考え込み型反応」としての「創作」の意味

ブログ内容をみればわかることだが、伊藤計劃は、思考を駆使した論理的な思索を深める能力に長けていたが、これは「考え込み型反応」に親和性のある能力ともいえる。例えば、『ハーモニー』出版時のインタビューでは、次のように語っている<sup>14)</sup>。

「僕は基本的に理屈人間なので、理屈でしか考えられない」「僕はまず、理屈が先にある感じです。理屈にそってキャラクターを作り、そのキャラが喋るロジックを魅力的に見せるにはどうしたらいいのかっていうことで話を考えていきます。いかにロジックを話に落としこむかっていう緩衝剤としてキャラクターは存在するわけです」

またそのロジックが、自らの病と無関係ではないことにも言及している。

「僕が考えるロジックというのは、やっぱり自分が生きている状況に関する、ある種の分析になってるんですね。なぜ、自分は今病院にいて、こうした治療を受けているんだろうとか、なぜ今はこういう医療体制なんだろうとか、そういうところから考え始めたある種、切実なロジックです」

創作行為に没入することは、ある種の「気晴らし型反応」としても有効に作用し、一時でも病や死を忘れて、自分の好きな世界に身を置くことを可能とする。特に『虐殺器官』に関しては、伊藤計劃が熱狂的に支持したゲーム(『スナッチャー』『メタル・ギア・ソリッド』)の二次創作(『Heavenscape』『フォックスの葬送』: 文献 12 に収録)<sup>15)</sup>、あるいは映画(『ファイト・クラブ』『CURE』)<sup>16, 17)</sup>や小説<sup>18)</sup>からインスパイアされたアイデアが創作の原動力となっている

と想像され、自分の嗜好性を存分に発揮することで紡ぎ出された作品と解釈することができる。

一方、より終末期に創作された『ハーモニー』<sup>注9)</sup>では、「死」を意識した内的葛藤が、物語の内容にも強く反映されていると考えられる。『ハーモニー』では、その結末として「人類の意識が消滅した世界」が描かれるが、それは脳を医療分子で制御し、脳内における葛藤状態が消失することで成就される世界である。「内的葛藤状況」を「意識の消滅」によって解決するというアイデアは、「死」に対峙する伊藤計劃の「切実なロジック」のなかで生み出された可能性がある。

「意識の消滅。そのような大事を我々だけで結論づけることはできなかった。わたしとて怖い。自分が自分であると意識できなくなることは……ある意味で、死に等しい状況だ。」(『ハーモニー』p 266)

「身体が、脳が熱を失い、意識が、わたしはわたしであるという意識が、死という、昔ながらの単純で複雑な仕組みによって消え去っていく。」(『ハーモニー』p 352)

『ハーモニー』を創作していた時期の伊藤計劃にとって、「死」を自分自身に納得させるロジックを組み上げることが、最大の関心事であったに違いない。ただし直接的に「死」をテーマとして扱うことは、「考え込み型反応」のデメリットである抑うつ状態を遷延させるリスクをもともなう。しかしそれでも、伊藤計劃は、論理的な思考によって物事を理解しようとする性格特性を持っていた。伊藤計劃にとっての創作とは、「死と対峙する」ことを避けつつ、「死と対峙する」という相矛盾する心理状況を、同時に矛盾なく遂行させるための手段だったのかもしれない。

ちなみに伊藤計劃の遺稿となった『屍者の帝国』<sup>注10)</sup>は、その死後、円城塔が完成させて2012年に発刊されたが、刊行までの経緯を、担当編集者はツイッターで次のように語っている。

「年が明けて計劃氏は（結果として）最期の入院をされます。体調的には原稿は書けませんでした。が、病床でも『屍者の帝国』の作品世界を構築し続けました。そして間もなく症状が悪化、医者から「最期の時がいつか分かりませんが、覚悟しておくように」と告知されます。「どうなるかはわかりません。2, 3年後には、あんな深刻な話をあのときはしてしまいすみませんでした、と笑っているかもしれない」と計劃氏はいいました。「もしかしたら『屍者の帝国』を完成させる時間はもうないかもしれない」とも。言葉が出ませんでした。企画も当然、一時凍結すべきか。不躰を承知で「もし、あとひと月で死ぬとしたら何がやりたいか」と尋ねると、計劃氏は「小説を書きたい」と即答されました。今書きかけの『屍者の帝国』を、と。氏は自分の紡ぐ物語が読者に届くことを望まれました。」

心理学者のE・S・シュナイドマンは、「人は人が生きてきたように死んでいく」<sup>35)</sup>と述べた。伊藤計劃は、「もし、あとひと月で死ぬとしたら何がやりたいか」と編集者から問われ、「小説を書きたい」と即答した。柳田邦男は、がんで死去した著名人の終末期の様子を紹介しているが、自己表現を仕事とした人物は、最期まで仕事を続けることを望む人が多いようである。漫画家・手塚治虫の最後の言葉は、「仕事をさせてくれ」であったという<sup>44)</sup>。死を前にして生き方が変わる人もいるし、変わらない人もいる。「映画を観て」「小説を読んで」「友人と語り」「自分の好きな物語を創る」という伊藤計劃の生き方は、最期まで一貫して変わらなかったようにみえる。

#### 4. 「意識」「死」「進化心理学」

伊藤計劃が、創作において最も重視した脳科学的思想基盤は、「進化心理学」である。「進化心理学」とは、ダーウィンの進化論を基に、人間の行動や心理的傾向を、ヒトが自然淘汰による進化過程で獲得した形質として理解し、その適応的意味や機能的意味を説明しようとする心理学である<sup>3,6,23,25,26)</sup>。『虐殺器官』出版後のインタビューでは、同作品のアイデアに関する質問に対して、伊藤計劃は次のように答えている。

「ピンカーの著書やデネットの『自由は進化する』はすでに読んでいましたが、このアイデアを思いついてから進化心理学に関する本をいくつか急いで読みました。マイケル・ガザニガの『脳のなかの倫理』はとりわけ刺激を受けました。」<sup>11)</sup>「ローマ時代の人間にはわれわれのいう意味での意識は存在しなかった、という極論もあって、これはさすがに爆笑しましたが、『わたし』の根拠を科学が解体してゆく過程というのは、すこし前のイーガンがやっていたことですがスリリングなものです。」<sup>11)</sup>

「人間の意識」というテーマは、『虐殺器官』以前から伊藤計劃のなかにあり、オリジナル第二長編である『ハーモニー』においては、これがメインテーマとなっている。『ハーモニー』は2008年12月に発刊されたが、それに先立つ同年4月のS-Fマガジンにおいて短編『From the Nothing, with Love』<sup>11)</sup>が掲載されている。これはスパイ映画である007シリーズの世界観が下敷きとなっており、また遡ること2003年の武蔵野美術大学漫画研究会OG & OB本に掲載された『女王陛下の所有物』（文献12に収録）には既にそのアイデア（同じ人格情報の転写を別個体において繰り返していくことで「意識」が消失する）を基にした漫画が創作されている。『ハーモニー』の主テーマである「脳機能モジュールの操作」と「意識の消滅」の原型は、この短編作品のなかにみることができる。

『ハーモニー』の創作にもっとも深く関わった塩澤快浩（当時のS-Fマガジン編集長）は、S-Fマガジンの企画「伊藤計劃追悼」で、以下のように述べている。

「オリジナル第二長編『ハーモニー』の執筆は難航しました。07年の段階では限定核戦争を題材にした作品の構想を聞いていましたが、どうも執筆に踏み切るほどの面白さの確信がないといった雰囲気でした。それがようやく08年の春、『生命の帝国』という仮題で健康至上社会のアイデアが生まれ、（中略）初めて作品化の自信を得たようでした。それでも、（伊藤さんは単なるスランプだと思っていたが）おそろく死への恐怖によ

る鬱状態から執筆が滞ることもあり、脱稿してからも『これは小説と呼べるでしょうか?』とやけに自信なさげな伊藤さんがいました。いまから思えば伊藤さんは、当初から第二長篇として、意識の問題を扱った『ハーモニー』の内容を書きたかったのだと思います。常に死を意識せざるを得ない、自らの理不尽な境遇と折り合いをつけるために。（中略）そう考えれば、『ハーモニー』のアイデア面での原型ともいえる『From the Nothing, with Love』の、ただ語り続けることによって生にしがみつこうような、あの語りの必然性も、なんとか理解できるような気がします。もし伊藤さんが病に冒されなかったとしたら、はたして作家になったでしょうか——こんな問いは、作家・伊藤計劃を貶めるものかもしれません。けれど少なくとも、遺作となった『ハーモニー』のラストのような、あの優しく残酷な“生のありよう”は描かなかったのではないのでしょうか」<sup>34)</sup>

進化心理学的視点に関しては、伊藤計劃自身が、『ハーモニー』出版後のインタビューにおいて以下のように語っている。

「人間の持っている感情とか思考とかっていうものが、生物としての進化の産物でしかないっていう認識までいったところから見えてくるもの。その次の言葉があるのかどうか、っていうあたりを探ってる。」「共同体を論じる以前に、動物としての人間っていう部分が議論からすっぱり抜けているような気がする（中略）人間が動物である部分と社会的な存在である部分の折り合いをどうやってつけるのかっていうことに対して、あまり議論がないのが不思議な感じがして。い。（中略）共同体を立ち上げる前に、まず『人間』を把握するのが先じゃないか、と。」<sup>11)</sup>

また、『ハーモニー』発刊と同年に発表されたエッセイ『つぎはぎの王国から』『人という物語』でも、主に「進化心理学」と「意識」に関する記述がなされている<sup>11,12)</sup>。

「進化とは、あくまで環境に対するその場しのぎの集合体、ようするにつぎはぎでできた服のようなものなのだ。そこには一時的なプラスこそあれ、全体として前進しているわけではない。わたした

ちの心も、そのようなつぎはぎの産物だと、あなたは認められるだろうか。進化心理学、という学問がある。現在の人間の肉体が前記のような適応の積み重ねによってできあがったものだという思考を、心理にまで拡張した学問だ。(中略) 怒り、悲しみ、驚き、笑い。そうした『わたしの内面に』生起する感情が、何か環境適応の必要性によって生じ、遺伝的に獲得された、多くの『機能』と同列であり、適応と生存の必要性が、憎み、喜び、愛するという機能を脳に『場当たり的に』生じさせたのだ。たまたま突然変異的に『怒る』という情動反応を得たサルの遺伝子が、生存上得をしたから、現在の我々は怒ることができるのだ。』(『つぎはぎの王国から』<sup>12)</sup>)

「そもそも、意識とは『わたし』ということばで思い浮かべるようなひとつの塊ではない。そこには『進化』という言葉が『前向きに改善されていく』というイメージを誤って与えているのに似た誤解がある。(中略) 我々の身体はそうした環境に適応するための様々な機能のパッチワークなのだ。それは、わたしたちがひとつの全体だと思い込んでいる魂も同様だ。喜ぶこと、怒ること、悲しむこと、愉しむこと。我々が感じる感情はすべて、『生存に必要なことから』人類の脳内に『その場しのぎ』で備わった機能に過ぎない。(中略) 『意識受動仮説』というものがある。音を聞く、何かを見る、意識の前の段階が判断する、そして筋肉を動かして何かをする。人間の意識の前にそうしたすべてが行われ、判断と行動が起こったあとで『わたしがそれをやることを決意した』と思い込むのが『意識』である、という仮説だ。(中略) では、いったい何のために『意識』は必要なのだろうか。それは物語を紡ぐためだ。(中略) 意識は『出来事』を『記憶』としてとりまとめるために存在する。脳のネットワークが『つぎはぎ』現実から生成した現実、そして意識下が決断し行動した諸々、そうしたものをひと続きの出来事、言い換えるなら『物語』へと編集するために、記述するために存在するのだ。(中略) こう言ってもいいだろう。魂が存在するのは、物語を紡ぐためだと。人間の脳は、現実を物語として語り直すために存在するのだと。(中略) 脳という『フィクションを製造し、編集する器官』から魂と呼ばれる『状態』が生まれる以上、人はそれ自身がフィクションであることから逃れられない。(中略) 現実とは物語ではない。しかし、人間は現実を物語として処理する機能を脳に与えられた。(中略)

そしてわたしは作家として、いまここに記しているようにわたし自身のフィクションを語る。この物語があなたの記憶に残るかどうかはわからない。しかし、わたしはその可能性に賭けていまこの文章を書いている。』(『人という物語』)

このエッセイでも引用され、伊藤計劃がその思索的基盤としたと考えられる文献が、前野隆司著『脳はなぜ「こころ」を作ったのか——「私」の謎を解く受動意識仮説』<sup>19)</sup>である。本書の要約はインターネット上でも参照できるため<sup>20)</sup>、ここで詳細に取り上げることはしないが、注目すべきは、同書が「進化心理学」の視点を用いながら、「死」をひとつのテーマとしていることにある。著者である前野は、同書のプロローグにおいて、その執筆の動機を、「自分の心は、死んだらどうなってしまうんだろう」と幼少期に思い悩んだ経験にあると述べている<sup>注12)</sup>。

「意識の問題」と「死に対する認識」は、伊藤計劃のなかでおそらく交差している。そしてそれらの問題意識が、『ハーモニー』の内容にも影響を与えたであろうことは想像に難くない。『ハーモニー』の結末では、個人の意識が消失し、人為的なコンピューターネットの世界に取り込まれる形で物語が集結するが、一方で、そのような状態が自然な進化の過程でも生じていたという伏線が設定されている。(ミァハの出自として、意識を生み出す遺伝子が欠如した少数民族の一人であったことが明らかにされる)。人類の進化の結果として「意識を必要としない民族」が存在したという『ハーモニー』の伏線は、伊藤計劃が「意識のない状態」を悲観的な帰結のみでなく、前向きな側面も持ちえ则认为していたことの傍証かもしれない。以下は『ハーモニー』の一節である (p 264-5) (下線は筆者による)。

「ミァハたちは、実験でそれを経験したのだ。意識が消失するというその状態を。

この星に生きる数十億の人間。その長い進化の道のり、いつか、どこかの時点で人間は『意志』なるものを獲得した。進化というのは、極めて場当

たりのなものだ。そのときそのときの環境に適応する遺伝子が残る。その色々な適応、いわば継ぎ接ぎの適応の結果が、いまここに立っているヒトという種であり、そこに実装された意識なる奇妙な作用なのだ。

『恍惚だった、と「戻って」きたミアハは語っていたよ』

と父さんは苦笑しながら語る。

『意識を失っている間、彼女は普通に食事をし、勉強をし、わたしたちと語らい、つまり平然と生活を続けた。我々が意識を戻した後、ミアハはその間のことは何も覚えていない、と言った。ただ、ぼんやりとした幸福な世界に包まれて、恍惚だけを経験していた、と』

それは解る気がする。動物たちは人間に比べてどうにも幸せそうだと思うことがある。木の枝で凍えて落ちる鳥は、惨めさを知らないと誰かが言っていた。ミアハが感じたのは人間が意識を獲得する遥か以前の脳の状態、内省や鏡写しの迷宮に入り込む前の世界だったのだろう。」

あるいは、作家の新城カズマは追悼文のなかで、生前の伊藤に対して新城が、「『虐殺器官』に登場する）兵士の苦痛が自在に制御されるとなると、彼らはいったい戦友意識を抱けるんでしょうかね？」<sup>注13)</sup>という質問をした逸話を紹介し、それを「自らの軽率で高慢な言動」であったと振り返りつつ、その理由を、以下のように著している。「彼（伊藤計劃）が苦痛について知らなかったはずはないのです。苦痛について考えなかったはずがないのです。彼の闘病が正確にいつ始まったのか、あの作品を書く前なのか後なのか。あるいは、そうした確認こそ瑣末事なのかもしれません。彼が苦痛について、苦痛の制御について、苦痛からの解放について、あらゆる制御と解放について、思いを巡らせなかったはずはないのですから。どこかの時点で。最期の瞬間まで。」<sup>33)</sup>

そして小説『ハーモニー』に、その伊藤計劃が思いを巡らせたであろう「制御と解放」を見いだすならば、それは以下のような一節のなかにあるのではないかと思う。

「社会的動物である人間にとって、感情や意識と

いう機能を必要とする環境が、いつの時点でかとくに過ぎ去っていたら。我々が糖尿病を治療するように、感情や意識を『治療』して脳の機能から消し去ってしまうことに何の躊躇があるのか。かつて人類には、怒りが必要だった。かつて人類には、喜びが必要だった。かつて人類には、哀しみが必要だった。かつて人類には、楽しみが必要だった。かつて、かつて、かつて。それは過ぎ去った環境と時代に向けられる弔いの言葉。かつて人類には、私が私であるという思い込みが必要だった。」（『ハーモニー』p 326）

「ある程度まで相互扶助が保たれる社会システムが組み上がってしまえば、実は意識などという時代遅れの機能は不要になって消し去られる運命にあることを示しているのではないか。人間は、進んで自らの組み上げたシステムに従って、対立や逡巡、苦悩を生む厄介な機能としての意識を除去してしまうべきなのではないか。私を動かしている『何故』という感情は、どこに根拠を持つべきなのだろう。魂を擁護する言葉は、どこにあるのだろう。」（『ハーモニー』p 327）

#### IV 結 語

本論作成の動機は、『伊藤計劃記録 第弐位相』の闘病記としての価値を見出したことに端を発している。本論が、医療関係者なども含めた多くの人達に、『伊藤計劃』を紹介する一助になればと思う<sup>注14)</sup>。我々は、伊藤計劃が作り出したフィクションである小説を読む。そして同時に、病と死に対峙した『伊藤計劃』というリアルな物語をそこに見出し、各人が各様として何かを感じとる。伊藤計劃がぎりぎりの境地で、必死に何かをつかみとろうとした痕跡。それは読む人それぞれの死生観であり、物語を通して気づく自分自身のリアルである。フィクションであり、エンターテインメントであり、そしてリアルが混在する小説。それが『伊藤計劃』である。

謝辞：本論作成にあたり、貴重なご助言を賜りました明智龍男先生、高柳カヨ子先生、神林長平先生に深謝申し上げます。

注1) エッセイ『制御された現実とは何か』（文献12に

再録)には、「インターネットで僕のわずらった肉腫の5年生存率を調べると50-70%とか出てくる」と書かれている。

注2) 伊藤計劃のブログ(伊藤計劃:第貳位相)は、現在(2015年)もネット上ですべて閲覧可能(<http://d.hatena.ne.jp/Projectitoh/>)。2004年4月から2009年1月までの全ブログの総日数は459日で、またそのうち書籍『伊藤計劃 第貳位相』<sup>12)</sup>に掲載されているのは151日分であり、本論はそのなかの8日分から抜粋して資料とした。

注3) ノレン-ホエクセマは、反芻思考(rumination, ruminative coping, ruminative response style: 考え込み型反応)と抑うつ状態との関連性をテーマとして研究を続け、2008年には総説を発表している<sup>30)</sup>。それによると、その後の研究において反芻思考は、抑うつ状態の「持続期間」よりも「発症」の予測因子となること、また前向きな気晴らし(positive distraction)は抑うつ気分を軽減するとの報告が数多くあるものの、相關研究においては抑うつ症状の低減とは相關しなかったと報告している。

注4) 伊藤計劃は、自分が無宗教あるいは無神論者であると語っている。「大多数の日本人は実質的に無宗教だけれど(中略)、みんなそれがどれだけ恐ろしいことなのかわかっていない。無宗教ということは、死んだ後に何も保証がないということだからだ」<sup>11)</sup>「ぼくは今のところ自分の死に怯える無神論者だから」<sup>12)</sup>

注5) 伊藤計劃は、ゲーム『メタルギア』シリーズのファンであり、2008年には『メタルギアソリッド4』(MGS4)のノベライズを執筆している<sup>9)</sup>。ゲームクリエイター小島秀夫と伊藤計劃の交流は、同文庫版あとがきを参照のこと。ちなみにゲーム『MGS2』(2002年)は、「情報による管理」と「文化的遺伝子(MEME: ミーム)」(リチャード・ドーキンスが提唱した概念)をテーマとしている<sup>2,14)</sup>。これは『ハーモニー』における「ネットワーク社会による統治」「進化心理学」につながる視点かもしれない。また伊藤計劃が、作品・物語を遺そうとした意味や動機を「ミーム」で説明することも可能かもしれない。

注6) 映画『ファイト・クラブ』の「プロジェクト・メイヘム(騒乱計画)」は、『ハーモニー』の「大災禍(ザ・メイルストロム)」、あるいは『虐殺器官』のエピローグにある「アメリカ全土を覆い尽くした内戦状態」とイメージが重なる。またペンネーム伊藤計劃(プロジェクト・イトウ)の由来は別に語られているが<sup>11)</sup>、「プロジェクト・メイヘム」からの影響もあるかもしれない。また伊藤計劃は、「黒のファッション」をトレードマークとしていたが<sup>32)</sup>、これも映画『ファイト・クラブ』のプロジェクト・メイヘムのメンバー(スペース・モンキーズ)のファッション(黒ずくめの服装)が影響していたかもしれない。

注7) 伊藤計劃は、インタビューやブログにおいて、『ハーモニー』の登場人物ミアハが『ファイト・クラブ』の登場人物タイラー・ダーデンを模したキャラクターであると語っている<sup>11)</sup>。『ハーモニー』の登場人物ミアハは、伊藤計劃の論理的思考を代弁させるためのイデオログと考えれば理解しやすい。

注8) SF作家ブルース・スターリングを「私にとって最も重要な作家」<sup>11)</sup>と語っている。なかでも『ハーモニー』の世界観に影響を与えたと考えられるのが、スターリング著『ホーリー・ファイアー』<sup>37)</sup>である。同作品で描かれている「健康第一主義の医療経済を中心とした社会構造」や主人公である医療エコノミストの「ミア」などは、『ハーモニー』の「福利厚生社会」「医療合意共同体」といった世界観や、登場人物「ミアハ」の原型とみなせるかもしれない。

注9) 『ハーモニー』のプロットは、実は全体として『虐殺器官』に似通っており、主人公(トアン/グラヴィス・シェパード)が、謎の人物(ミアハ/ジョン・ポール)を追いかけて世界を駆け巡り、最終盤でその人物から事の真相をきかされることで価値観の逆転が起こり、さらにその人物の企みを阻止できない(一般的な物語では、計画を阻止してハッピーエンドとなるところを)ことにより、さらに価値観の逆転が生じる、という構造になっている。

注10) 円城塔は、『屍者の帝国』発刊時のインタビューにおいて以下の発言をしている。「伊藤計劃が以前よりずっと興味をもっていたのは『哲学的ゾンビ』なんです。自分以外の人がゾンビであったときになにが困るのか。わりと彼はそこにこだわりを持っていた。ただ、僕はその話はやや苦手なんです。わかるんだけど、そこまで心に響かない。(中略)『ハーモニー』のラストが哲学的ゾンビの話かどうかは、はっきりわからない。あのラストには当人も巻き込まれていますから。」<sup>4)</sup>「かろうじて僕が付け加えられたのは『登場人物のクオリア、って何』という部分ですね。ほぼそれだけ。クオリア、大好きなんです。伊藤計劃は(クオリアを)そんなに好きじゃなかったですけど。」<sup>5)</sup>。「クオリア」に関する伊藤計劃自身の発言は以下。「クオリアって結局人間の神秘化に貢献しているだけですからね。その先に突き抜けるのが科学のおもしろさだと思うんですけど。(中略)人間って素晴らしいね、っていう結論に落ち着ければ安心するわけで、科学ってそういうものじゃないと思うんですけどね。たぶんね、無意味であることに耐えられないんですよ人間は。(中略)科学が差し出すものに意味がなければいけなくて、そこで耐える力をみんなで勉強すべきだと(笑)。」<sup>11)</sup>。円城塔と伊藤計劃の『哲学的ゾンビ』『クオリア』<sup>20)</sup>に対するスタンスの違いをみただけでも、伊藤計劃の志向性(ある種の透徹した諦観のなかに希望を見いだそうとする)を垣間みることができるようと思われる。

注11) 『虐殺器官』に関しては、スティーブ・ピンカーの著書(『言語を生み出す本能』『人間の本性を考える』『心の仕組み』)からの影響が言及されており<sup>11)</sup>、また登場人物ジョン・ポールのモデルは言語学者であるスティーブ・ピンカーではないかと考えられる。『ハーモニー』に関しては、「中脳の報酬系」「双極割引曲線」はジョージ・エインズリー著『誘惑される意志』を、また「リベットの実験」「受動意識仮説」は前野隆司の著作<sup>19,20,21)</sup>を参考文献とすると読み解きやすい。

注12) 前野隆司は、心身一元論に立脚している<sup>20)</sup>。前野の「死」に対する認識論は、2013年刊の著書『死ぬのが怖い』とはどういうことか<sup>21)</sup>においても引き続き論じられている。

注13) 小説『虐殺器官』では、兵士がカウンセリングと薬物によって「戦闘適応感情調整」と「痛覚マスキング」を脳に施され、痛みや感情などの苦痛を調整・排除できる状態となって戦地に赴く、という設定がある。

注14) 本論は、小説『ハーモニー』のネタバレを含んでいるが、本小説を読まなければ理解できない構成にもなっているため、未読の方のために、『ハーモニー』の荒筋(初版本の紹介文を基に加筆・改変)を記載しておく。(注意:ただし、さらなるネタバレであるため、これから小説を読まれるつもりの方は、以下の文章を回避のこと。興味を持たれた方は、ぜひとも実際に小説を手にとっていたければ幸いです。)

「21世紀後半、〈大災禍〉と呼ばれる世界的な混乱を経て、

人類は医療経済を核にした福祉厚生社会を実現していた。誰もが互いのことを気遣い、親密に“しなければならない”ユートピア。体内を常時監視する医療分子により病気はほぼ消滅し、人々は健康を第一とする価値観による社会を形成したのだ。人類の生体データは、ネットワークされた恒常的健康監視システムによって管理されていた。そんな優しさと倫理で首を絞めるような社会に倦んだ3人の女子高生、御冷ミヅハ、霧慧トアン、零下堂キアンは、自分達だけの抵抗を試みる。それはミヅハが提案した餓死という選択だった。しかし実際に死んだのは、先導したミヅハのみ。——それから13年。かつて自殺を試みて死ねなかった少女・霧慧トアンは、世界保健機構の生命監査機関に所属していた。久しぶりに再会したトアンとキアンだったが、そのランチの席、突然、キアンはテーブルナイフを自らの喉元に突き刺し自死する。そして同時刻、世界の至る所で多くの人間が自らの命を絶った。この何者かによって仕組まれた大量自殺事件の捜査をはじめた監察官トアンは、世界を襲う大混乱の真相を探るなか、父親である霧慧スエザと再会する。トアンの父は、研究機関「次世代ヒト行動特性記述ワーキンググループ」において「人の意志を制御する」ための脳研究を行っていた。そしてその実験の被験者が、死んだはずのミヅハであったことを知らされる。ネットワークを通じて人類の脳を操作する権限を持ったミヅハを追って、トアンはひとりチェチェンへと飛ぶ。そこでトアンは、ミヅハが語る「完璧な人類」と「ユートピア」の構想を聞かされるのだが…。これは、“人類”の最終局面に立ち会ったふたりの女性の物語——『虐殺器官』の著者が描く、ユートピアの臨界点。』

## 文 献

- 1) 明智龍男：がんとこころのケア。NHK出版、東京、2003。
- 2) ベンソン、R. 著、富永和子訳：メタルギア ソリッド 2 サンズ オブ リバティ。角川文庫、東京、2011。
- 3) Cartwright, J. H. : Evolutionary explanations of human behavior. Routledge, 2001. (ジョン・H・カートライト著、鈴木光太郎・河野和明訳：進化心理学入門。新曜社、東京、2005。)
- 4) 円城塔：円城塔インタビュー。S-F マガジン、53 (11) : 34-41, 2012。
- 5) 円城塔：インタビュー「故・伊藤計劃との共著『屍者の帝国』を完成させて」。毎日新聞、2012年9月6日。
- 6) 長谷川寿一、長谷川真理子：進化と人間行動。東京大学出版会、東京、2000。
- 7) 菱川敬子、槌田洋子、岡田美登里ほか：癌終末期患者におけるコーピング行動の分析 ラザルスのストレス・コーピングモデルを用いて。死の臨床、22, 239, 1999。
- 8) 伊藤計劃：虐殺器官。早川書房、東京、2007。(2010年ハヤカワ文庫より発刊)
- 9) 伊藤計劃：メタルギア ソリッド ガンズ オブ ザ パトリオット。角川書店、東京、2008。(2010年角川文庫より発刊)
- 10) 伊藤計劃：ハーモニー。早川書房、東京、2008。(2010年ハヤカワ文庫より発刊)(引用した項数は文庫版による)
- 11) 伊藤計劃著、早川書房編集部編：伊藤計劃記録。早川書房、東京、2010。
- 12) 伊藤計劃著、早川書房編集部編：伊藤計劃記録 第式位相。早川書房、東京、2011。
- 13) 神林長平：神林長平インタビュー「リアルに対抗しうるフィクションの力とはなにか」。S-F マガジン、53 (9) : 174-181, 2012。
- 14) 小島秀夫：小島秀夫監督ロング・インタビュー。S-F マガジン、51 (7) : 10-19, 2010。
- 15) E. キューブラー、ロス。著、鈴木晶訳：死ぬ瞬間——死とその過程について。中央公論新社、東京、2001。(原書は1969年に出版)
- 16) ラザルス、R.S. 講演、林峻一郎編・訳：ストレスとコーピング——ラザルス理論への招待。星和書店、東京、1990。
- 17) Lazarus, R. S., Folkman, S. : Stress, Appraisal, and Coping. Springer, New York, 1984. (ラザルス、R. S., フォルクマン、S. 著、本明寛、春木豊、織田正美監修・訳：ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究。実務教育出版、東京、1991。)
- 18) Lazarus, R. S. : Stress and Emotion : A New Synthesis. Springer, New York, 1999. (ラザルス、R. S. 著、本明寛監修・訳、小川浩、野口京子、八尋華那雄訳：ストレスと情動の心理学——ナラティブ研究の視点から。実務教育出版、東京、2004。)
- 19) 前野隆司：脳はなぜ「心」を作ったのか——「私」の謎を解く受動意識仮説。筑摩書房、東京、2004。
- 20) 前野隆司：意識の起源と進化——意識はエピソード記憶のために生じたのか。現代思想、34 (2) : 224-239, 2006。
- 21) 前野隆司：「死ぬのが怖い」とはどういうことか。講談社、東京、2013。
- 22) Mayou, R. A., Ehlers, A., Hobbs, M. : Psychological debriefing for road traffic accident victims : Three-year follow-up of a randomised controlled trial. Br J Psychiatry, 176, 589-593, 2000。
- 23) Moalem, S., Prince, J. : Survival of the sickest. William Morrow, New York, 2007. (シャロン・モアレム、ジョナサン・プリンス著、矢野真千子訳：迷惑な進化——病気の遺伝子はどこから来たのか。NHK出版、東京、2007。)

- 24) 中村敬：森田療法の治療作用——「第三世代」の認知行動療法との比較から。精神療法, 36, 17-23, 2010.
- 25) Nesse, R. M., Williams, G. C. : Why we get sick : The new science of Darwinian medicine. Vintage books, 1994. (R. M. ネシー, G. C. ウィリアムズ著, 長谷川真理子, 長谷川寿一, 青木千里訳：病気はなぜ, あるのか——進化医学による新しい理解. 新曜社, 東京, 2001.)
- 26) NHK スペシャル取材班：ヒューマン——なぜヒトは人間になれたのか。角川書店, 東京, 2012.
- 27) Nolen-Hoeksema, S. : Sex differences in unipolar depression : evidence and theory. Psychol Bull, 101 : 259-282, 1987.
- 28) Morrow J., Nolen-Hoeksema, S. : Effects of responses to depression on the remediation of depressive affect. J Pers Soc Psychol, 58 : 519-527, 1990.
- 29) Nolen-Hoeksema, S., Morrow, J. : A prospective study of depression and posttraumatic stress symptoms after a natural disaster : the 1989 Loma Prieta Earthquake. J Pers Soc Psychol, 61 : 115-121, 1991.
- 30) Nolen-Hoeksema, S. : Women who think too much. Henry Holt, 2003. (ノーレン=ホークセマ, S. 著, 古川奈々子訳：考えすぎる女たち. ヴィレッジブックス, 東京, 2006)
- 31) Nolen-Hoeksema, S., Wisco, B. E., Lyubomirsky, S. : Rethinking Rumination. Perspectives on Psychological Science, 3 : 400-424, 2008.
- 32) 大森望：大森望の新SF観光局 第6回「伊藤計劃氏のこと。」. S-Fマガジン, 50(8) : 239-243. 2009.
- 33) 新城カズマ：An Apo-enlogy. 「伊藤計劃追悼」. S-Fマガジン, 50(8) : 236. 2009.
- 34) 塩澤快浩：ただ, 安らかに. 「伊藤計劃追悼」. S-Fマガジン, 50(8) : 238. 2009.
- 35) Shneidman, E. S. : Deaths of Man. Quadrangle, New York, 1973. (シュナイドマン, E. S. 著, 白井徳満, 白井幸子, 本間修訳：死にゆく時——そして残されるもの. 誠信書房, 東京, 1980.)
- 36) Smith, E. E., Nolen-Hoeksema, S., et al. : Atkinson & Hilgard's introduction to psychology 14th edition. Thomson Learning, Stamford, 2003. (内田一成監修・訳：第14版 ヒルガードの心理学. プレーン出版, 東京, 2005.)
- 37) スターリング, B. 著, 小川隆訳：ホーリー・ファイアー. アスペクト, 東京, 1998.
- 38) 高橋徹：悪性リンパ腫症例における心理的変遷と精神療法的介入——「疾病受容」をめぐる諸問題について. 臨床精神医学, 38 : 1189-1197, 2009.
- 39) 高橋徹：認知療法中止例に学ぶ情緒不安定性パーソナリティ障害における精神療法的介入の工夫. 井上和臣著・編：パーソナリティ障害の認知療法——ケースから学ぶ臨床の実際. 岩崎学術出版社, 東京, pp 81-100, 2011.
- 40) 丹野義彦：エビデンス臨床心理学——認知行動理論の最前線. 日本評論社, 東京, 2001.
- 41) 友田貴子, 坂本真士, 木島伸彦：大学生のうつ病および抑うつ気分への対処について. 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 376-377, 1995.
- 42) 友田貴子, 岩田昇, 坂本真士ほか：抑うつ気分への対処と抑うつ気分の持続期間の関連. 日本心理学会第60回大会発表論文集, 912, 1996.
- 43) Watters, E. : Crazy Like Us : The Globalization of the American Psyche. Sterling lord literistic, New York, 2010. (ウォッターズ, E. 著, 阿部宏美訳：クレイジー・ライク・アメリカ——心の病はいかに輸出されたか. 紀伊国屋書店, 東京, 2013.)
- 44) 柳田邦男：新・がん50人の勇気——昭和天皇から本田美奈子まで. 文藝春秋, 85 : 2006.